

【エッセイ】

## 広島だより；遊び人・通人と風来坊

山 中 一 郎

### 1 広島・平和公園のハト

広島市の市街地もここ20年で、大きく変わった。数年前、この地を訪れた知人は、「広島って、ずいぶん山が近くにあるんですね。それと川が多い。それに、思っていたより狭い町ですね」と驚いたように呟いた。中国地方の中核的な都市と言う思いがあったからであろう。人口、約120万人と聞けば、もっと広い地域的な空間を想像していたのかも知れない。また山とは言え、武蔵丘陵のようななだらかな山ではない。高尾山か丹沢連峰以上の山並みである。このような山でも、冬の季節、日本海、玄界灘からの強風を遮り、広島市の町は温暖な気候に恵まれていると言える。広島市は、住むには良い所なのだろうが、最近の気象変動で、いささか地質の面で問題が露呈してきた。花崗岩が変質した「真砂土」という土壌の上に来た街らしい。広島に来た頃は、ワイシャツの襟の汚れが、東京程には感じられなかったので、クリーニング代が助かると感じたものであった。東京の土質は、関東ローム層と言われ、強い風と共に、一日ごとにワイシャツを変えたものだ。後日、その「真砂土」が土砂災害の元凶と聞いて愕然とした。

20数年前、定年後は、生まれ故郷で「老後」を過ごすのも悪くはないと考え、広島に戻ることを決意した。広島には、と言うより、私が産まれた呉市には殆どこれと言うほどの記憶も無いし、私の方の親戚は、原爆で死亡したり、他の県に移ったりして、殆どいないも同然なのだが、妙にその地名に愛着があつた。

理由は分からない。ただ、出版物などの裏書には、必ず出身地は「広島県」と書くことに拘ってきた。ただ敗戦の翌年の夏休みに、母の姉が「音戸」に住んでいると言うことで、一度来たことがある。戦後、一年も経ったと言うのに、呉の駅舎も市街地もアメリカ軍の空襲で完全に廃墟と化したままだった。人の通りも全くといってよいほどなく、駅を警備する2～3人のオーストラリア兵の姿が見られたくらい、周囲は閑散として人の気配がなかった。未だ「音戸」近くの海岸に旧海軍の巡洋艦が無残な姿で打ち上げられていた。駅から「灰ヶ峰」の麓まで一面見渡せた。かつての我が家がどこなのかも分からず仕舞いであった。ご存知かもしれないが、戦前、私たち一家が住んでいた「呉という街」は、「海軍さん」の街であった。海軍の鎮守府があり、戦艦「長門・陸奥」等が停泊、かつては日本最大級の海軍の基地であった。それなりに賑やかさもあった。江田島には海軍のエリート将校を養成する海軍兵学校があった。広島市には陸軍の第11師団司令部、広島陸軍幼年学校、陸軍の工兵隊等もあり、日本軍の一大兵站基地でもあった。そして、これまた、広島駅から宇品駅まで鉄道が引かれていた。宇品には中国大陸等、外地への兵員等の輸送基地があったからである。広島市の東西には、二か所大きな「遊郭」があった。言うなれば広島には、戦前から、所謂「反社会的な暴力集団」が寄生する基盤(素地)があったと言えるだろう。広島には、帝国大学こそなかったが、広島文理科大学(附属素粒子論の研究所)もあった。広島高等工業学校、広島高等学校(旧制)、広島高等師範学校等もあったが「軍都」とも言えるだろう。そして、「宇品港」は「軍需物資」という巨大な富と利権の集散地であったのである。

戦後の高度経済成長期、所謂「組織暴力団」同士の利害をめぐる葛藤の温床は既に此処にあったとも言える。広島の「暴力団抗争」は、大阪、神戸、福岡、を結ぶ要衝部での抗争でもある。その内実たるや、聞くに堪えない凶悪、陰湿なものである。いま広島県人の話し言葉は、殆ど共通語に変わってしまったが、昭和の頃は、未だ独特な「言葉」であった。所謂「広島弁」で話されると、特

別なものがあった。「広島弁」での「喧嘩口論」は独特のものがあり、聞くだけで恐怖感を感じるほどである。

\*この広島で起きた所謂「暴力団の対立抗争事件」は、後に「広島戦争」とも呼ばれた。呉に本拠を置く山村組(現在の共政会)と広島に本拠を置く村越組をそれぞれ中核とする暴力集団の抗争である。広島市の彼らの縄張りには、まさに広島市中区の繁華街中心として、九州一帯の鉱山(関連収入源を東西(九州と関西圏)に二分する場所にあった。所謂、暴力団は、近代より博徒を中心とするが、特色として、川筋での人足等の斡旋)、港湾(横浜、神戸、福岡港での荷役等)、売春、娯楽・興行等をそれぞれ取り仕切っている。近年は特に、多様化しており、巧妙になっている。広島での抗争は、彼らの業態としても残忍、狂暴、凶悪である。「糞尿」を玄関にまき散らすと言うことまでしたと言う。多くのジャーナリストがルポしたり、本に書いている。映画にもなった。広島暴力団抗争は、戦後の1950年から始まり、一次、二次、三次と抗争、鎮静とを繰り返し、最終的には1980年に終結したとき。

\*東京の勤め先から、横浜に帰宅するさい湘南電車内でのことである。席は午後の事でもありすいてはいたがかなりの人数の乗客がいた。40前後の男が一人、四人の席に一人で座っていた。タバコを吸いながら、なにやら鼻歌を歌い始めた。乗客の一人が、「お静かにして頂けませんか」と言った途端、「おどりゃー、何言いよるんかい」と大声で怒鳴り返してきた。あたり全体が急にシーンとした。何とも言えない空気になった。横浜につくまで異様とも言える張り詰めた雰囲気であった。私は、直感的に、彼が広島での暴力団関係者の一人と感じた。

\*これは私的なことだが、今の若者は恐らく誰も信じないような事だが、

実際に有った話だから書いておく。私の一番年上の従弟の話である。彼は広島高等工業専門学校の学生として、戦後も宇品にいた。毎日、呉から通っていた。帰りは「音戸」へ帰るのだから、遅くなる。当時、彼は宇品で被爆したし、被爆の後かたづけもしたのでヒバクシャである。その彼が呉で下車し、音戸の家に帰るとき、呉市街の暗闇で2人のオーストラリア兵に襲われ、背中を刺され、金も取られた。足は、回復せず、片方の足は何時も引きずって歩いていた。その後、保障は有ったそうだが、足は最後まで引きずったままだった。戦争は、少しもいいことがない、「平和こそ全て」である、とつくづく思う。

ところで、前に「軍都」と書いたが、今、広島市の市街地は、ご多分に漏れず、人口が全体的に減少している。しかも高齢者人口比率は逆に増加の一途をたどっている。此の10年間で、高齢者比率は25%から35%へと増加。特に市街地中心部で、この傾向は顕著である。その中でとりわけ際立って目立つものがある。マンション建設の異様とも言える増加である。空き地が、いつの間にかマンションになっている。需要を無視した供給過剰とも言える現象である。50年後の、広島が恐ろしい。マンションのスラム化現象は、既に始まっているからだ。大学さえ、今年、新設学部を閉部にしたところもある。更に興味を引くのは「写真館」が多く残っているということである。軍人は、事あるごとに記念として「写真」を撮った。入隊、昇進、外地に行くとき等であるが、それ以外の需要も多かった。事あるごとに記念としての写真の需要は多かった。庶民にとって、当時高級品であったものが、「電話と写真機」であった。今は誰もが気軽に使用し得るものが「電話と写真」(スマホ)である。それでも、記念に一枚となると、「写真館」のおでましとなる。これが、今も尚残っている要因であろう。それに市街地中心部に最近少なくともなくなったものの、所謂「ラブホテル」が多い。広島は、かつては大中企業の支店の街であった。最近では、大企業

同士が合併したりして、企業も地方企業中心となったものの、支店は相変わらず多い。こうしたこともあつて、「ラブホテル」もまだ需要があるのであろうと、埒も無いことを考えながら、平和公園を散策し、気が付いたのは「ハト」が随分減ってしまったことである。5、6年前、公園の芝生でよく日向ぼっこしているハトの群れを見かけたものであった。ハトは芝生で、その顔を時計の針の動きのように太陽の動きにつれ顔を向け、羽を膨らませて、うづくまつていた。「向日性」(?)と言うのか、今、そういった光景が見られなくなったのが寂しい。平和の象徴も、数が増えて、多くなつては人間社会では迷惑なのかも知れない。しかし、カラスなどは相変わらず多い。人間社会のエゴかどうかは知らないが、困ったものである。動物の世界も弱肉強食か？

## 2 遊び人と風来坊；敗戦後に渡された報奨金？確か百円？

生来、「真面目を標榜」し過ごして来たような男である。「取柄」と言うものが皆無。と言うのも、冒険は怖いし、何事にも挑戦すると言う意思がそもそも皆無である。「臆病」なだけなのかもしれない。中学生の頃、道を歩いていて前の方から「硬派」と呼ばれた連中が歩いてくるのを見ると、わき道にそれ、彼らをやり過ごしてから歩くと言う性格の弱さがある。彼らは、顔を合わせただけで「眼を付けた」と言つては金銭、腕時計を巻き上げたり、ときに殴りかかってくる。逃げるが勝ちである。多勢に無勢の私はつい逃げ出してしまうと言うことになる。彼らは「硬派不良少年」と呼ばれた「集団」で、大正、昭和の戦後のある時期まで、よく街を徘徊していたし、見かけたものである。中学の上級生も、不良少年でもないのに、よく何かと理由を付けては、「鉄拳制裁」と称し、下級生を殴ったものである。彼らは、ただ殴ることに快感を感じていたのかも知れない。殴ること自体が面白かったのかも知れない。言うなれば「社会病質的」か「単なるサディスト」だったのかも。とにかく、彼らは、弱いも

の虐め、「殴打」が好きだった。

＊明治以降、この様な少年は、様々の名称で呼ばれてきた。私の少年だった頃は所謂「非行少年」は、一般的には「不良」と呼ばれていた。通称である。更に、「硬派」、「軟派」と呼ばれる連中も居た。さらに、時代の影響もあったのであろうが、「思想上の不良少年」を挙げる人も居た。詳しくは拙稿「非行少年処遇対策の歴史の変遷」(明治学院論叢；186号)を見て欲しい。

私は、また体育が嫌いと言うより、苦手で、最初は「跳び箱」も怖くて跳べなかった。走ることもまた苦手であった。「びり」にはならなかったが、大学では100メートル19秒が記録。バスケットボールに至っては、何度試みてもボールが網に入らず、周りの連中から笑われていたものだ。水泳も駄目で、母と海水浴に行っても、母がさっそうと抜き手で泳いでいるのを砂浜に座ってただ見ているだけ。そんな少年であった。だから将来の希望はと聞かれても、何とも答えられず、黙って俯いていた。半面、「まあ何とかなるだろう」と言う諦めにも似た気持があった。もし戦争中、召集され兵隊になっても、まず乙種か丙種で徴兵されることは先ずないだろうと思つたりもした。それが、敗戦で事情が変わってしまった。全ての「権威、権力の否定。日本解体」が連合国の占領目的であり、政策であった。「日本の無力化」である。この先、日本が、どうなるか分からないのだから、私如きがどうなるかも勿論、わかつたはずがない。ところで、記憶が定かでないから、正確な日付までは分からないのだが、敗戦の年の初冬の頃と記憶している。勤労働員の「報奨金」(?)と言うのが、中学三年の時、急に教室で生徒全員に手渡された。何のためのお金かの説明もなかったように思う。正確な金額も忘れたが、十銭紙幣(当時、五銭と十銭の小額紙幣があり、ピンク色、横長で正面左側に塔のような絵が印刷してあったと記憶

しているのです、多分十銭札であったように思う)が百枚位束ねたのを、全員が受け取ったと思う。当時は、何でこのようなお金が渡されたのか、まったく理由が分からなかった。今もって分からないのだが。渡す教師の方も、ただ理由も告げず無造作に手渡した。百円位である、このお金をどのように使ったかの記憶も全くない。未だ殆どの教員が占領軍による「教育研修？」を受けに何処かに行ってしまうと、授業らしい授業は殆ど為されてはいなかった。教科書は廃棄され、新聞紙大の紙に印刷した応急的な教科書なるものが配布された。それを各自、折ったり、切ったりして、教科書を作った。だから、きちんとした授業が為されたと言う記憶も無い。当時は、毎日をどのように過ごしていたのだろうか。冬近く、北風が吹く中、私は新宿の府立6中(当時府立15中は戦災で焼失、府立6中、現在の都立新宿高校に仮住まいしていた)から帰宅すべく大きなスコップを手にし新宿駅へと歩いていた。辺りはすべて空襲で焼けており、焼け残った電柱に「梨本宮逮捕か」と大きく書かれた「号外」の張り紙が、寒空の中、いまにも強風で千切れ飛ばされそうなのを、複雑な思いで見た記憶がある。皇族が「戦争犯罪人」として逮捕されるかも知れないと言う思いがあったし、それがどこまで広がるのかと言う思いで、新聞も世間も動揺と不安、焦燥の日々であった。

その頃の冬の寒さは格別であった。燃料、炭も石炭、石油もない。食べるものも無い。何もないのである。生きる目的すらない。労働争議は頻発、人員減首も頻発。労働組合員による会社幹部の「人民裁判」も話題になった。此の様は、「裁判」と言うより、むしろ「集団によるリンチ」であった。それらを見るたびに「不安」になった。虚無的な気分だった自分の姿が、まだ心に残っている。世の中は、極めて不透明、不安定であった。物価は高騰、戦後の悪性インフレの時代に入ったのはこの後すぐのことで、この報奨金(?)については全く記憶がない。私の先輩でもある知人は、これをきっかけに、歌舞伎、演劇、音楽に落語と言った芸能、芸術の面白さを知るきっかけを作ったと私に後日話された

が、私には有効に使った記憶が全くない。ひたすら空腹を満たすために使ったのかもしれない。知人は、今自らを「遊び人」と称し、私は自らを「風来坊」と称している。「知識人」と、単に「知識人を気取っている」両者の違いは自ずから鮮明である。情けない。先輩には、未だ叱られっぱなしである。このような「エッセイ」自体が、お小言の対象になることを恐れている。

\*おそらく多くの人は、漠然とした思いはあるかも知れないが、誰がなんの為に支給したかの理由も定かではないだろう。私も、今もってわかっていない。確かに中等学校の授業料を支払うものの、学業は殆ど受けられずに、私は府中のN製鋼所に勤労働員された。最初は、大森のY電気に動員され、無線機器のようなものの組立をさせられていたが、開戦翌年のドーリットル提督率いるB24の東京をはじめとする京浜工業地帯、名古屋等の空襲によって工場は焼失した。その後、急遽、東京府下、府中にあるN製鋼所に、再び学徒動員で行くことになる。通うには遠すぎると言うことで、会社の寮に入るようになった。それ以降、敗戦まで、2週間働いて土曜日夕方帰宅、日曜日の夕方、寮に戻ると言う生活がつづくことになる。昼は、工場で働き、夜は、一時間の授業が受けられた。寮から工場までは電車で一駅ほどあり、毎日徒歩で往復した。多くの学生は栄養失調でいつも下痢をしていた。食べるものは大豆が主食のようなものであり、大豆を炒ったものに軽く塩で味付けしたものも主食代わりにしていた。それを食べては、水でお腹を満たすのだから「下痢」しない方がおかしい。帰宅した次の日の夜は、ほとんど眠る事が出来なかった。皆が、代わる代わるトイレに駆け込むからである。戦後は、約半年、授業らしい授業は無く、府立6中に、一時、間借りした我々は、その間の殆どを食料生産と言っては、当時「新宿御苑」の芝生の掘り耕しに動員されていた。スコップを持っての通学はそのためであった。各自が耕作のための道具持参、靴は今のような靴は無

いので、足袋、とかサンダルを履いていた。さすがに、もうゲートルは巻いていなかったと思う。旧麻布3連隊の焼け跡に、仮の校舎が出来たのは敗戦の翌年だったと思う。食糧難は解消せず、我々は未だ食糧の自給にこだわっていた。校舎の前が、神宮球場でもあり、われわれは、その広場こそ絶好の耕作地との思いから、早速、耕し始めた。そこへアメリカンフットボールの服装をしたアメリカ兵が顔色を変え、跳んできた。我々に出ていけと言う。出ざるを得ない。そんな時代も経験した。多くの屈辱も味わった。連合軍の命令は、それがたとえ一兵卒であっても「絶対」であった。

\*終戦後、授業は教科書を占領軍がチェックして彼らにとって問題のある箇所は墨で塗りつぶして使用した。文系、歴史等の科目は新しく印刷されたが、製本は生徒が各自作成した。しかし大部分の時間は、食料生産のための労働に費やされた。スコップ、鍬など自宅にあるものを各自が持ってきた。奇妙な時代である。さぞかし、滑稽な姿であったと思う、府立6中から新宿駅までは当時、博徒・尾津組支配の闇市があり、そこを通らねば帰宅できなかつた。

戦後の大学受験は、毎年のように「受験制度」が変わった。占領政策の一環としての教育制度の抜本的な改革を行うと言うことであった。アメリカから「教育委員会」(正確な名称は忘れた、教育制度視察団?)が派遣され「教育制度改革委員会」?(正確な名称は記憶していない)なるものが設置された。何でも出来たようで私の通っていた中学(今の都立高校)ではアメリカの、どこやらの大学教授が突然来訪、生徒全員の頭蓋骨の測定を始めた。後年、それが「頭蓋係数」(Cephalic index)の測定と分かったが、かなり強引な手法であったと思う。(ネオ・ロンブローゾ學派と思はれる)調査・研究の説明もなく、アメリカ合衆国にとっても、占領軍にとっても、「日本」は、何でもできる、安上がりの「実

験の場」のようなものであった。大学・高等学校等の受験制度についても同様であった。学校制度自体も変わった。私の高校の同僚は、来年になったら「専門部」は無くなると言って、某私立大の専門部に入学した。彼の予想したように、翌年「専門部」は無くなり、大学学部と合併された。彼が得意げに「新しい角帽」を被り歩くのを見たことがある。突然の制度改革によって辛酸と苦痛をなめた人も多数いたと思う。私の時は最も混乱した時であったように思う。医学部受験者は、突然、文学部の「医学部進学課程」に入学するように言われ、受験科目外に、厚さ2センチはあるような冊子が渡された。1ページに、1問ずつ、問題が書いてあるのを瞬時に回答するのである。今もって、何のためのテストなのか分からない。その頃は、一次合格者は「身体検査」も義務づけられていた。男性は「すっ裸」にされ、体中を調べられた。囚人同様であった、場所は、医学部。次の年には、この様な身体検査は無くなったと言うことである。二次合格者には面接もあり、2人一組の教師の前で10分位の面接を受けた。次の年度の入試は、また変わったようである。私の頃は、人権そのものが無かったと言える。「公職追放」も突然の実施である。これでは、将来の希望など立てられるわけではない。毎日をいかに無事に、何事もなく過ごすのかで頭の中はいっぱいであった。

受験生の中には、海軍兵学校、陸軍幼年学校から戻ってきた連中も多かった。彼らの顔からは、苦悩と安堵が伺われた。彼らにとっては、まさに「死からの生還」である。彼らは、「今後どのような生を生きるのだろう」、私は中学で一年先輩のその後ろ姿に一筋の希望を求めた。この希望は、半分近くは達せられたが、残りの約半数は消えてしまったようである。通常の入学試験を受け入学した学生の約30%近くは、卒業時、連絡が取れなかった。私の卒業した大学では、文経法工医学部で、卒業生総数1900人弱であった。校舎の大部分が空襲で焼失、校庭での卒業式であった。学生よりも教師の数が多いと言う「専攻」も多かった。今や隔世の感あるのみ。ただ言わせてもらえれば、私は、小・中・高・

大学と満足な建物の中での入学式、授業、卒業式を経験したことがない。そんな時代もあったと言うことである。

ところで、風来坊の私は、ある日、授業を終えて帰途についた。大井町駅で降り、その日は、ゼームス坂を歩いて帰宅した。たまたまである、いつもは省線電車沿いの脇道を通って帰るのだが、その日はなぜか繁華街に向かって歩いていた。この道は広くバスも通るほどの幅があった。ただ坂道と、少々遠いので、それが嫌だった。その日、坂道を下って帰る途中、道路で車に轢かれた犬の無残な姿(内臓が露呈していた)を見て卒倒した。以来、カエルの解剖も出来なくなった。この私が「医学部進学課程」を希望したのも無知であった。気弱で、「もやし」のごとく細くやせこけた私は、まさに魂を悪魔に奪われた「ぼーっとした風来坊」であった。このような役立たずの風来坊であっても、何とか友人にだけは恵まれていた。多くの友人がいた。いつも帰宅すると、必ず何人か、友人が訪ねてきた。帰宅すると、私は必ず「和服」に着替えた。普段、男性が和服を着ると言うことは珍しい事らしく、友人は、必ず「おい病気か」と尋ねた。和服は病気の時に着るものと言うのが常識のようであった。大いに珍しかったのであろう。しかし、私は次第に落ちこぼれ、体育でもなかなか合格点が取れず、どうにかみんなの3倍鍛えられて合格、卒業出来た。友人に恵まれた結果である。よく泊まりに来たり、遊びにも来た。夜遅く散歩がてら、また友人を駅まで送りがてら、外出したりして警察官の職務質問を受けたりもした。とにかく、臆病で、ツキもなく、風来坊で、義兄から「ぺんぺん草」は生やすなと言われながらも、忠告に背いてしまったようである。ここで「遊び人」と私が呼んでいる御仁(知人)は立派な方で、専門分野でも多くの業績を残され、極めて現状を肯定的に捉えて毎日を過ごされておられる。今後も、どうぞよろしくお願いしたい。同僚と言うより先輩である。その方は、「私は点で生きている」と言われ、「君は線で生きよう」としていると言われる。私も、これからは「点で生きる」ことに努力したい。また、私も真の「遊び人」になりた

かった。だが「なり損ねた」。時すでに遅し。残念であり、無念でもある。

\* 「専門教育」を受ける前に、「一般教育」を身に着けるべきだと言うのが当時のアメリカの教育理念であった。とりわけ、医学教育は専門性が高く、更なる教養が要求されるべきだと考えられた。しかしこの思考は日本では受け入れられなかったようである。私は、教養は無いより有った方が良いと思う。話術、ウイット、ユーモアのセンス、コミュニケーション能力など、外国では社交でも重視される。10分か15分で、気が利いた話が出来ると言うことは素晴らしい事だと思う。日本では「沈黙は金」が未だ通用している。「喋る人」は「良くしゃべるねー」と言って敬遠されるようである。

\* 「遊び人」は「無頼の徒」ではない。「粋な人」とは、教養豊かで感性のある教養人である。「あの人って粋だねえ」と言われる人は古くは酒井芳一が代表格であろう。魯山人も挙げられるかもしれない。とにかく、あらゆる意味で、代表選手である。「粋な人」はだんだん少なくなってきて、所謂、成金趣味の人が多いのが現状である。私の先生は、稀な人であり、「粋な人」である。ここで敢えて取り上げさせて頂いたのも、無断であるが。半世紀以上にも当てるご交情、まさに満身創痍の身ながら、長い独居生活に奮闘されておられる先生にエールを送ると共に、長年のご厚情、気配りに感謝するためである。

### 3 反社会的犯罪って何なの、寓話？；宿命か；広島ギャング抗争！

日本は、何事につけ、どうにも歯切れの悪い、曖昧さを好む国である。「反社会的組織・集団」という言葉自体、どこかしっくりとこない。アメリカでは、シカゴ・ギャングが全盛だった19世紀から20世紀にかけて、彼らのボスが

イタリア系移民といこともあって「MAFIA」という言葉が定着した。マフィアと言う言葉の成り立ちからして「中国系マフィア」「メキシコ系マフィア」と言う言葉は元来ありえない言葉である。マフィアは組織的犯罪集団でありボスは、ほぼシチリア島の出身者に限られている。彼らは、長期にわたってアメリカ合衆国の殆どをその勢力圏に収めてきたと言ってよい。しかし、20世紀後半から「Cosa Nostra」と呼ばれる犯罪者集団も横行し始めた。我々には、彼らの相違点は分からないが、少しこのような連中に関心のある者ならその出自等からその違いが分かるらしい。アメリカの場合、現在では組織犯罪(Organized crime)、ストリート・ギャングという言葉がほぼ定着使用されているようである。反社会的という言葉は、あまり使用されていないようである。むしろ「ホワイトカラー犯罪」「企業犯罪」「組織体犯罪」(Organizational crime)の方が使用される頻度は高い。日本で最近「反社会的」集団であるとか、「反社会的」組織、「反社会的」勢力と言う言葉が使われるが、社会的と反社会的、非社会的の違いが明確に区別されない現状では、いささか問題が残ると思う。令和元年7月、様々な事件がメディアで報道されている。そこで「反社会的な連中」と言われている人達は、「職業的犯罪者集団」「暴力団」である。そして、ここに登場してきた人たちの昭和30年代の姿は「関東姉ヶ崎一家」と言われた組織と近い関係にあった人もいる。当時は「神農会」「街商会」が各都道府県に存在していたし、「博徒」の集団も勢力を競っていた。詳細を述べることは、個人情報に関係することなのでこれ以上は控えざるを得ない。ただ、彼らのある種の会合には、当時の内閣総理大臣から肩書、名前入りの花輪が贈られていた時代もあった。こうした時代の残滓が今も残っていることは否定できない。彼らは、時に「業界の人」と自分を呼び、また「任侠界に生きる男」という。今も「任侠の世界;男の世界」は、社会の闇の部分で生き続けている。いつまた、顔を出すかは分からない。と言うのも、アメリカなどの研究事例を見るとこの問題はそれ程、簡単な問題とは思われないからである。いつまた息を吹き返す

か分からない。幸い、今のわが国には「犯罪都市」と言われる都市は存在しない。われわれは以前、アメリカの「シカゴ」を「犯罪都市」と呼んだことがある。多分にマスコミの影響もあったようであるが。当時、アメリカでも、そう思われたようである。ある社会学者は、「犯罪都市、シカゴが、なぜ世界的に有名になったのか、シカゴと言えば～犯罪～を連想するのは、いかなる理由によるものか」と問題提起した。V.S.Yarros教授は、National Municipal Review (Vol,15 June) に「Crime and Political Corruption in Chicago; Facts versus Melodrama」と題する一文を掲載した。(p.313～p.320)彼によれば、「シカゴの状況を、犯罪、犯罪的悪徳、大酒家、政治的汚職・腐敗と言った点からみた場合、他のどこより悪いとする意見は何らの根拠も無い」と言う。こうした意見は時事評論家、卓抜した法律家、裁判官、社会事業家達によって、書簡であるとか、私的な話題として語られていることは確かである。また密売酒造業者がいることも確かであるし、彼らが裕福であることも否定はしていない。しかし、彼らは自分が悪いことをしていると思ってもいない。彼らのお得意さんも、決して悪い人ばかりでもない。警察官も、このことは十分承知しているから手心を加える。一罰百戒である。超自然的にナイーブな者だけが「Chicago is dry」だと信じているに過ぎない。だが、シカゴは決してドライでもなく、そうはあり得ない。きわめて信心深い家庭でも、車中でも、ホテルでも飲酒は行はれているのが現実であると述べ、謀殺、殺人、強盗の件数を示し、そのことを実証しようとした。そして、彼は生命保険会社の顧問相談役のホフマン氏の調査からも、これらの犯罪よりも高い犯罪率を示している都市として、フロリダ州のジャクソンビル、テネシー州のメンフィス、ニューヨーク、デトロイトの方が多く、このような犯罪問題は、ローカルな問題と言うより、全国的問題として考えられるべきだと述べた。禁酒法の時代の話であろうが、われわれは今も「予断」で話をすることが多い。

日本でも同様であろう。通常「新宿・歌舞伎町＝暴力団員が大勢いる町、縄

張り争いが絶えない町＝怖い街」と言う「イメージ」を持っている。「危険もありうる街」にも拘らず、仕事を終えた会社員は大挙して押しかける。「反社会的な連中の屯する街」に敢えて出かけるのである。不思議と言えば不思議、不可解と言えば不可解な行為である。今、我々は極めて「微妙な時代状況」にある。「矛盾した状況」の中で生活しているのである。「単純なラベリング」で決めつけること、判断は危険である。僅かの事で人は「怒り」を増幅させる。さらに「宗教」、とりわけ「神道」の問題は、「祭り」と関係した時、日本では、難しい、デリケートな問題となる。「祭り」には歴史的にも、様々な生い立ちがある。太古の昔から朝廷の儀式として行はれてきたものもあれば、「人心の掌握」と言った「統制的・政策的」なものもあると考えられる。江戸時代の寺社奉行の支配下に置かれた神社、仏閣では。各種の賭博行為も黙認、奨励されたりもした。刑事犯罪などを手掛ける町奉行の権限外の場所であった。所謂「合法的な無法地帯？」であった。敢えて、「曖昧」にしておく方が統治者には都合が良いのかも知れない。

「マイナンバー制度」にしても、あれほど宣伝しておきながらまだ20%に満たないという。それに、折角、出かけて窓口を受け取りに行っても、本人確認のための証拠が足りないと言って交付してくれない。本人自身が行き、本人自身の写真入りのカードを受け取るのに何の支障があるのだろうか。公務員の杓子定規なやり方には承服し兼ねる。これでは、普及するはずがない。政府、自治体も、どうして本気に、やるからには最後まで徹底してやらないのか。普及に集中しないのか。何事も中途半端な社会である。これでは、無理を押しでまで、時間を作って努力した者が損をする。マイナンバー制度をうまく利用すれば、裏社会の事情も、お金の流れも、少しは把握できると思う。シカゴ・マフィアのボスであったアル・カボネの逮捕も殺人罪ではなく、脱税であった。飛行場が自宅内にあるようなアメリカのマフィアのボスである。上は官僚の世界から、下部は清掃車、自動販売機の組織まで、また労働組合の世界からフランチャイ

ズの組織まで、くまなく支配している犯罪組織である。規模が違うとはいえ、日本のギャング団も無視することは出来ない。裏社会に蠢く「国際的な組織犯罪(International Organized Crime)の青写真」は、既に来あがっているかも知れない。構成員は日本人とばかりは言い切れない。かなりの高学歴、国際的な人間関係を持つ、国境を越えた、所謂大物たちの存在は不気味である。スタンフォード大学出身の暴力団構成員も居るようになった日本である。くれぐれもご注意を。

\* 組織犯罪については、警察庁科学警察研究所による「現存暴力団の実態、第一次、二次、三次、四次報告」が昭和42年以降出されている。また山口組については、兵庫県警察本部と関西学院大学による「広域暴力団の社会的背景～神戸市を中心に；昭和47年12月」がある。外国の文献としては、J.R.Nash [Encyclopedia of World Crime; 1989] に日本の暴力団についての記述がかなり詳しく記載されている。全部で6巻あり、かなり膨大なものである。日本についての記述も多い。

#### 4 点と線：生き方と覚悟

いつも、これが私にとって最後の原稿になるかと思いながら書いている。私は、自称「遊び人」と称する先生を敬っている。先生は「生粋の江戸っ子」である。田舎者の私には、所詮「はなっから太刀打ちできるわけがない」と思っている。その先生に「君は世界没落感」(Welt Untergang Gefule)に陥っている、と言われた。考えてみれば数年前に「絶望のバラード」と言う詩を書き、曲を付けCDにしたことがある。その数年後、東日本大震災が起き、悲惨な「原発事故」が起きた。確かに年と共に、「絶望感」が高まり、「不安」に苛まれることが多くなった。先生いわく、君は2～30代であれば「統合失調症」と診断さ

れかねない、所謂「希死願望」もゼロではないと診断された。確かに、これまで「2～3回、希死願望はあった」と思う。先生は、若ければ、統合失調症も疑われるであろうが、「知的レベルから見て」、此の歳では「鬱・Melancholie」と言った方が適切であろうと言う見立てである。しかし、今の時点では、周囲の連中は「認知症」を心配しているようだ。時に「軽度の躁」と思われる状態になることもある。この時は「至福の時」である。仕事が捗ると言う思いからである。本当にそうかは分からない。が毎日ではない。殆どは毎日が「生」との葛藤である。やれやれと思いながらも、今日の事は明日、片付けることにしようと考えてしまうことが多い。「平和公園のハト」にしても。私は先の事を考え過ぎる、今の世界の未来を考え過ぎる。私の歳では、そうシリアスな問題ではないのに、つい、突き放せずに「絶望感」に陥ってしまう。そして、この歳になると、毎日のように知人、著名人の「死」の報告を聞き、「葬儀社のテレビ広告」が流れたりすると、目を背け、耳を塞ぎたくなる。明日は我が身と思ってしまうからだ。これは、恐らく「自然」の事だと思うのだが。先日、周りからしつこく言われたので、気休めと思って「認知症の検査」を受けた。先生は事前に「満点と言うことは有りませんから」と私を、落ち着かせるためか言った。結果は、ほぼ完全であった。何故か私は、ほっと安心した。

この辺りで「遊び人」の正体が分かりかけたので、このエッセーも終わることにしたい。最後に、いささかキザと思われるかも知れないが、日本人が、ことのほか執着する「ギネス・記録」の国の話を一つ。未だ、北アイルランド紛争が続いていた頃の話である。私はスコットランドの小さな港町、Stranraerから、連絡船に乗り、Belfastの北の方に位置するLarneに着いた。静かな港町で人口も少ないようであった。民宿に泊まった。夜9時と言うのに、まだ明るく日本の夏の夕方の感じであった。驚いたのは、外へ出ると沢山の子供たちが、ボールで遊んでいる光景である。こんなにも多くの子供たちが住んでいるんだ。これは「まさに異様な光景である」と私は思った。昼は無人と言うよ

うな街なのに、この光景は何だろうと、今も考えている。宿に戻ると、主人が「裏がゴルフ場なので一回りしてくると良いですよ。無料で出来ますから」と言う。私は「ゴルフは出来ないの」と言う。「それは残念ですな。私など、毎日してますよ、明日の朝も行きます」と言った。朝食の時、「一回りして来ました」と気楽な顔をして言った。私は「はー」としか言えなかった。昼過ぎ、Belfastを通つて、Dublinへと向かった。未だ、北アイルランド紛争の激しかった頃で、紛争地中心部Belfastの検問は格別に厳しいものであった。だが、アイルランド共和国の入国は簡単に、すぐ済んだ。首都Dublinの中とも言えるDun Laoghaireと言う街である。何故ここに泊まったかと言うと、Belfastの旅行案内所の紹介である。沢山の有名な詩人、小説家を輩出した「Ireland」に一度は行ってみたいと言う思いからだ。確かに、住民の誰もが彼らの事を知り、敬愛の念を持ち彼の詩について文学について彼らなりに話してくれた。日本で、この様な経験がなかった私は驚きを隠せなかった。そう言えば、イギリスでも高校生くらいから町や村ごとに自分の作った詩の朗読会をする慣習が古くから存在していると言う話を聞いたことがある。イギリス人(広い意味)の、またアイルランドの民謡は日本人にとっても馴染み深いものである。明治以降、小学唱歌として、また讚美歌として、日本でも馴染みの深い歌が多い。彼らにとって、詩は「日常的」生活の一部となっているのかも知れない。私の好きな詩がある。少し長いが、読んで欲しい。《John Keats; On Death》と《W.B. Yeats; Death》、いずれも「死」と関連がある。90歳近くなると、いやでもこのテーマとして、も向かい合わざるを得ないことをお許しいただきたい。またダブリンでは、誰でもがジェイムス・ジョイスに敬愛の念を抱き、市民の皆から敬愛されていることが肌で感じられた。市民全員が「ユリシーズ」を読んでいるとは思えないのに。皆、優しい人ばかりだった。

Can death be sleep, when life is but a dream

And scenes of bliss pass as a phantom by ?  
The transient pleasures as a vision seem,  
And yet we think the greatest pain's to die.  
How strange it ts that man on earth should roam,  
And lead a life of woe, but not forsake,  
His rugged path; nor dare he view alone  
His future doom which is but to awake.

まさにこれこそ理想的な「死」の姿ではなからうか。キーツの詩の最後の部分は、まさにその通りと言わざるを得ない。同感である。「難波の事も夢のまた夢」に通じる思考である。また「この世は苦しい事ばかりなのに、われわれは茨の道より、安楽な道を選ぶ」と言うのも、多くの人にとっては常道。これもまさにそのとおり。イエーツの詩の最初のところは、異論もあろうが、「諦観」と言う考えが日本にもある。「死」については、誰しも一度は触れておきたい課題ではなからうか。

Nor dread nor hope attend  
A dying animal;  
A man awaits his end  
Dreading and hoping all;  
Many times he died,  
Many times rose again,  
A great man in his pride  
Confronting murderous men  
Casts derision upon  
Superssession of breath;

He knows death to the bone  
Man has created death.

「遊び人」も大変だと思う。私なら息切れがしてしまう。だから「遊び人」もまた必死に遊ぶ。この時とばかり。恐らく、疲れるであろうし、そこには毎日が「必死」な「生・Leben」との「葛藤と追求」があると思う。これ以上は、僭越ながら、私には分らない。

\*最後に一言申し述べておきたい。かつて、アイルランド共和国の首都ダブリンで民泊した時の事、その女将さんが私に言った言葉「第二次世界大戦で唯一日本と戦争をしなかったのはアイルランドです。日本は大変な思いをしたことでしょう。」私は、そのことを知らなかった。咄嗟の事で「教えていただいて有難う」と言えなかったことが残念である。余りにも唐突であった。不意を突かれた思いもあった。「風来坊」とは最後まで駄目人間である。そして、「広島」について書いても、結局私は広島県人になれそうにもないし、かといって、今更、東京都民、神奈川県民にもなれない。私の存在とは何であったのか？寂しいと言えば寂しいし、気楽と言えば、気楽であるが、また悲しくもある。まさにハイマートロス(Heimatlose/vertriebene)の心境である。

\*また、此処に挙げた詩の訳文は沢山あるので、好みのものを。ヴェルレーヌ詩集(新潮社)堀口大学訳を読んだ事がある。「秋の歌」「わびしい対話」「巷に雨の降るごとく」「屋根の向こうに」は、原文がつけてあった。名訳が既に有ったためであろう。門外漢の私が、これ以上、立ち入ることは辞めておきたい。また、「遊び人」は、所謂《Playboy》ではない「真の教養人」であることを付け加えておく。